ReD は記録の仕組みを問います。



［ワークショップ ReD］

「ハンセン病」を視(み)せてあげる[1)]

――NHK 放送の 2 つの番組からドキュメンタリ・リテラシへ――

阿　部　安　成

◆　毎年 6 月には、ハンセン病をめぐる特別な時間が設けられている。その名称を「ハンセン病を正しく理解する週間」という[2)]。その 1 週間に厚生労働省や各都道府県が実施する行事として、これまで、写真展や講演会が催されてきた。今年 2015 年 6 月には、その週間からははずれていたが、NHK がハンセン病を主題とした 2 本の番組を放送し、いつもとは違うようすをみせていた。滋賀県内で視聴できるかぎりでは、この 6 月にハンセン病をとりあげたテレビ・ドキュメンタリはほかになかった。

---

1) 本稿は 2015 年度日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究 C「20 世紀日本の感染症管理と生をめぐる文化研究」（JSPS 科研費 26370788、研究代表者石居人也）、2015 年度滋賀大学経済学部学術後援基金研究テーマ「歴史資料の保存と公開と活用の実践論」、2015 年度滋賀大学環境総合研究センタープロジェクト研究「療養所環境を交ぜる」の成果であり、2015 年度滋賀大学経済学部ワークショップ ReD〔Rethinking excessively for Documentation〕の活動の一斑でもある。

2) 阿部安成「異物混入―知念ウシを読む」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.231、2015 年 6 月）を参照。『朝日新聞』（大阪本社版）にかぎった 6 月のハンセン病関係報道も同稿を参照。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

NHK の番組は、1 つが、2015 年 6 月 10 日放送『探検バクモン』「ハンセン病を知っていますか」（NHK 総合大津、録画時間 25 分。以下『探検』と略記）、もう 1 つが、2015 年 6 月 11 日再放送（初回放送 6 月 4 日）『ハートネット TV シリーズ戦後 70 年』第 5 回「ハンセン病の戦後―人間回復への道」（NHKE テレ大阪、録画時間 30 分。以下『HNTV』と略記）である（再放送を視聴したのでその情報をあげた）。両番組の放送時間はおおよそおなじ、どちらにも登場する人物がひとりいて、どちらもロケ地がおなじだった。

番組視聴まえから、前者についてはすでに違和を感じていた。それはいまテレビ機器をとおして得られるこの番組の紹介が感じさせた。まず「番組情報」をあげよう。

悲劇の歴史が刻まれた都内の国立ハンセン病療養所へ。田中、恐怖の監禁室に潜入！太田、88 歳元患者の壮絶人生に迫る！今夜衝撃の事実が明らかに。差別とは？生きるとは？

ついで「番組内容」を。

恐怖の監禁室に閉じ込められて、思わず絶叫する田中。そして教会と寺社が隣り合って並ぶ、謎のエリア。今回の舞台は悲劇の歴史が刻まれた、都内の国立ハンセン病療養所「多磨全生園」。90 年にわたる強制隔離の実態に一同驚がく！太田が直撃、88 歳・元患者の壮絶人生。差別とは？生きるとは？療養所内の納骨堂に 2600 人もの遺骨が眠る理由、絶えない花にこめられた思いとは？涙が止まらない、衝撃の事実が今夜明らかに。

――「悲劇の歴史」「壮絶人生」という紋切り型の表現に、「恐怖の」「衝撃の事実」「思わず絶叫」「謎の」といった煽情の言葉がわたしの違和感の元。「悲劇の歴史」「壮絶の人生」と「涙は止まらない」とがむすびつく。止まらない涙は悲劇を構成する必須アイテムということだ[3)]。あとで書くとおり、映像で実際に出演者の涙が視せられることとなる――ひと筋の涙。しかも女の涙だ。

「ハンセン病を知っていますか」と問うのだから、それを知るために番組をつくりそれを視せるわけだが、番組の予告となるその「情報」と「内容」を伝える文章が、とても陳

3) ハンセン病をめぐる感傷については、阿部安成『透過する隔離―療養所での生をめぐる批評の在処』（滋賀大学経済学部、2014 年）第 6 章「悲しみの解剖台」を参照。

ミセテ
あげる

腐で貧弱な言葉で粗雑につくられている体たらくが、わたしにはお粗末に視えたのだった。

◆　ここでは、どのようにドキュメンタリをとりあげようか[4)]。そのまえに、『探検』も『HNTV』もこれらはドキュメンタリなのだろうか。前者は（ハンセン病のつぎは東京スカイツリーをとりあげるとのことだし）「バラエティ」枠に入るかもしれず（のちに判明）、後者は「報道」かもしれない。

ドキュメンタリとは、一般には、「虚構を用いずに、実際の記録に基づいて作ったもの。記録文学・記録映画の類。実録」（『広辞苑』第 6 版）を指し、また、英語のそれは「記録作品」「記録もの」（順に『ジーニアズ英和大辞典』『リーダーズ英和辞典』）をあらわすという。どちらの番組も「実録」であり、「記録」にはちがいないのだろう。

番組の枠がバラエティであれ報道であれ、ともかくもテレビをとおして放送された番組は、カメラのまえの現実を写しとり、それを視聴者が視るテレビ画面に映しだしている。ただ文字で伝えるのでもなく（図書ではない）、音声のみで発信されるのでもなく（ラジオとは違う）、テレビに放送される番組にはかならず映像がある。ではその映像をとおして、文字や音声とともに、なにを視聴者におくっているのか、そこになにがあらわれているのか、それを問うとしよう。

なにかを伝達する手段はいま、かつてとは比べようもないほどに、多種多様となり、個別になり、安価で容易にそれを駆使できるようになったところがある。そうしたなかで、ではテレビ映像にはどういう機能や効果があるのか、なにができないのか、また、テレビはなにをしてしまっているのか、そうしたことをわたしは問いたいのである。

ハンセン病についてわたしは、多少なりとも、療養所をフィールドとして調査と研究をつづけているのでそれなりに、知っていること、考えているところがある。わたしの眼も療養所とそこに生きる人びとを視てきた。その眼にて、ここでは、NHK 放送の 2 つの番組

4) 映像ドキュメンタリについて考えるための習作に、阿部安成「ドキュメンタリ・リテラシの稽古―みる、よむ、かんがえる(1)」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.233、2015 年 7 月）などがある。

ミセテ
あげる

を検討するとしよう。

ここでは番組内容を手際よくまとめることをしない。うまいぐあいにそれを要約することをしない。わたしの関心にあわせてとりあげ、論じるべきこと、考えるべきことを示す。

◆　まず『探検』をみよう。番組が始まる――タイトルにもあらわれているとおり爆笑問題（紹介は「お笑い芸人」となるのだろうか「お笑いコンビ」か。以下、爆 1、爆 2、と略）のふたりにくわえて、男ひとり（この冒頭の時点では紹介がなく、だれなのか不明）、女ひとり（同前）が登場し、「ばくしょうもんだいが、いちぃまいのしぁゃしんとであった」のナレーションとともに、「したでてんじ〔舌〕〔点字〕をよむ、ぜつどく〔舌読〕」（ナレーション）の展示パネルが視せられ、爆 1 の「そぉぜつですね」の一言、ついで「こくりつはんせんびょうりょうようじょたまぜんしょうえん」（ナレーション。字幕では「国立療養所多磨全生園」）の空撮全景が視せられ、「かつてここに、おおくのひとびとがきょうせいかくり〔強制隔離〕された。そこは、ながくかくぜつ〔隔絶〕されたいいしつ〔異質〕なせかい」（「ハンセン病療養所を探検！」の字幕）、そして「衝撃の歴史があ明らかに！」と字幕とナレーション、「はちじゅうはっさいもとかんじゃのそうぜつじんせいにおおたがせまる」のナレーション（字幕は「88 歳元患者×太田／壮絶人生に迫る！」）、「らいかんじゃはりょうようじょにしゅうようしてそこでしんでもらうのが、くにのせいさくだった」（元患者。以下（元）と略）、「あなたは、ハンセン病を知っていますか」のナレーションと字幕、さきの女が流す涙（左目）の映像――ここまでが冒頭の 2 分あまり。（以下、ナレーションは（ナ）、字幕は（ジ）、映像は（映）と略。字幕とナレーションの双方があるときは表記にさいして後者を優先し字幕のある箇所に下線をひく。また、試みに、ナレーションなど音声だけの表記に漢字を用いないこととした）

視だしてすぐに、過剰な声色？、声質？のナレーションにうんざり。全編この調子だ。テーマ曲が流れると「DEEP INSIDE」の字幕。番組ロゴマークにもその文字があった。

「国立ハンセン病資料館」の入り口にいたる（映）と、「まずは、はんせんびょうってなにぃ、をしるため、りょうようじょのしきちにあるしぃりょうかんへ」の（ナ）。さきの男

ひとりと女ひとりがいて、男については「あんないにんは、しりょうかんのしぶ〜ゥ〜い学芸部長」（ナ）と紹介あり、女にはなし（以下それぞれ（芸）（女）と略。国立ハンセン病資料館は、資料館、と略）。（ここに登場した女は、のちに（元）とのインタヴュウにおいて、彼に「こちらのかた、だれよ」といわせることとなる。なぜ紹介しないのか？、視聴者には自明ということなのか？、おまけということか？、当人は紹介なしを了承しているのか？）

資料館入り口脇にある母子像を視せながら、かつては「らい病」（芸）とよばれていたハンセン病にかかると「共同体から外されて諸国をお遍路してあるく」（芸）との説明。つづいて（ナ）でハンセン病の歴史を概観する——

> はんせんびょうはかつて、らい病とよばれていた、らい菌によってまっしょうしんけい〔末梢神経〕やひふがおかされるかんせんしょう〔感染症〕だ。げんざい、にっぽんでかんじゃはほぼいないが、かつてはふち〔不治〕のやまいとされ、おそれられた。めいじじだい、かんじゃをぜんこくのりょうようじょにかくりするほうりつがしこうされる。そこには、はんせんびょうを文明国の恥とするしそうもあった。それはやがて、かんじゃを強制連行し、なおってもいっしょうりょうようじょからださないという絶対隔離政策へといたった。このしりょうかんにはにゅうしょしゃがおくった、壮絶な暮らしがてんじされている。

——資料館内に入り、1 階奥にある消防道具が視せられ、それすらも自前で用意しなくてはならないほどに隔離された施設には「壮絶な暮らし」があったと示され、「「村八分」ってゆう言葉がありますけど、死んでも、あの、家族が迎えに来てくれないんで、まあようするに、人によっては「村全部」なんだ、ってゆう、我々の社会が完全にこれを隔離して忘れていこうとしたってゆー、まあ、そういうばしょ」だとの（芸）による説明があった。

法律にさだめられた隔離が実施されてゆくと、それは「強制連行」となり、しかも療養所を退所することができない——こうした事態がまさに「壮絶な暮らし」ということだ。そして、療養所の外に生きるものたちは、そうした「暮らし」があることを「忘れていこうとした」というのである。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

ここには、隔離を基軸とした予防体制が、ハンセン病発症者に苛酷な暮らしを強いた、という理解が提示されている。では、これをどう視せてゆくのか。

◆　この番組にはいくつかの「MISSION」があるようだ。1 つめの「MISSION／療養所の隔離生活を体感せよ」（ナ）が示される。まずは、「雑居部屋（復元）」の展示まえへ。（芸）が 12 畳に単身男性 8 人が暮らしていたといい、ついで「そまつなきものにわずかなしょくじ」「かんじゃのおおくはほんみょうをかくしぎめいをなのった」「まるで、しゅうじんのようにあつかわれたという」と（ナ）が入り、「これがえいえんにつづく、わけなんですね、そとにはでられないという」（芸）、「ほんとに刑務所のように」（爆 2）となる。苛酷な生活の場が展示されている。その喩えに「刑務所」や「囚人」が用いられる常套がここにある。

「りょうようじょではえんないのほとんどのろうどうをかんじゃじしんにになわせていた。はたけしごとにぶたのしいく、どぉぼくこうじまで。じゅうしょうかんじゃのにじゅうよじかんかんごもかんじゃがになった。もっともきついろうどうだったが、にっきゅうはたばこひとはこかえるていど。かんじゃのふまんはつのるいっぽうだった。しかし、はんこうしたものには監禁というおもいばつがまっていた」との（ナ）があり――当時の動画や写真（映）――生活を成りたたせている環境もまた苛酷で、しかし鬱積する「不満」は聞き入れられず、かえってそれが「反抗」ととらえられて罰せられたという。

「刑務所」との喩えのそのもっとも極まったがようすが、「療養施設なのに監禁施設がある」ことである（芸）。「特別病室（再現）」展示のまえで、「特別病室という名前がついてるんですけど、実態は刑務所みたいなもので、で、しかも、うんようがひどかったんですね」（芸）とその極限となろう苛酷さが再現展示で視せられ、国立療養所栗生楽泉園（群馬県草津）の例として、監禁施設で「実は 23 人の方が（草津では）亡くなってます」（芸）との説明があり、（映）として草津のかつてのようすを写した動画と写真も示される[5)]。

[5)] 2014 年 4 月 30 日に厚生労働省によって草津町に重監房資料館が設置された。同館ホームページでパンフレットがダウンロードできる（2015 年 7 月 24 日閲覧）。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

そして、「さいげんされた監禁施設に田ぁ中が潜入！する」（ナ）。爆 2 が展示の「特別病室」に入ろうとすると、「人がいた」（爆 2）とぼそり語る。カメラスタッフがさきに入っていたのだが、そこで笑いが起こり、「こわい、ひとのあしがみえてる」の音声が入る――こうしたくだりが視せられても、わたしはまったく笑えなかった。不謹慎だなどといいたいのではない。まるで可笑しくないだけのことだ。

「くらさをじっさいに、その、じっかん」（女）するために、「特別病室」の扉が閉められる。そのなかの壁にある落書きや「あながあいてます」と「便所」が視せられる。そこで爆 2 が、「おれ、いまいるここね、一番大きな違いは、たぶんにおいじゃねえかなとおもうね。これたぶん相当なことになってた」と語る。これは重要な指摘で、この資料館の展示は、展示室にゆけばわかるとおり音の再生があっても、においについてはまったく展示されていないのだから。わたしたちはおうおうにして、過去のにおいそのものを体験することができないのである。代替物をとおしても。

◆　ラジオではなくテレビ番組なのだから、登場人物が映っているとき以外はおおよそ、過去の動画や写真などの実写映像が視せられている。なにも映っていないということはない。だかそのどれもが、療養所内の「壮絶な暮らし」のその「実態」を映してはいないのである。たとえば、「刑務所みたいな」というとき、「施設」の厚い壁や扉を映像で視せてはいるが、しかしその「監禁」のようすを実写した映像はない。また、いわゆる患者作業の映像はある。しかしその映像をとおして、「きつい労働」や「患者の不満」はほんの少しもうかがえないのだ。ここではテレビにおける主にして重要な伝達手段であるはずの映像が、その役割をめぐって反転してしまい、ただの挿絵になってしまっている。もっといえば、映像がなくてもこの番組のストーリーが成りたつのである。むしろ療養所をめぐる「壮絶な暮らし」や「悲劇の歴史」を表現しようとするとき、過去や現在の実写映像は邪魔になる。「元患者」が実際に語る証言映像だけが必要ということなのだ。

実際の映像がなければわからないというのではない。映像がないことをあらわすくふう

ミセテ
あげる

は、ここでは言葉だけなのである。ここには、臭いをめぐる展示の機能不全と、ドキュメンタリにおける映像それ自体の機能不全とがあらわれている。なぜラジオ放送のドキュメンタリではだめなのか。

さて、「にゅうしょしゃたちがうけたさべつはおわらなかった」（ナ）――特効薬プロミンの開発、「なおせるびょうきになった」こと、実際に「なおっていった」ことが示され、「きょうせいかくりをさだめたほおりつさえなければ、じゆうになれるはずだった」のに、しかし「そのほおりつはかたちをかえてせんごもしこうされ」、1996 年まで予防法がつづいたこと、「かれらをおそれるしゃかいのめものこった」ともいう（ナ）。ここに映像で、療養所内で歩く人びとが視せられる。それは後姿のみ、しかもモザイクをかけるひととそうでないひとがいる。

ここでナレーションが入り、現在は「全国 14 か所の療養所に 1700 人」の人びとが暮らしていると教えられる。なぜモザイクをかけなくてはならないのか、その説明はない。

「いっこうはいよいよ療養所エリアに潜入！」（ナ）と、いわば幕間（interlude）が入る。表現のとおりついに潜入ルポ――DEEP INSIDE――の様相だ。

◆　2 つめの「たんけんまえにミィイイッショオオン、MISSION／元患者の声を聴け！」（ナ）。通常の来館者が知りようのない応接室らしき部屋に場面が移る（もっとも史料整理箱のようなものもみえて、いくらか雑然としているのだが）。「元患者」「88」（ジ）がいる。

依然として療養所に暮らすひとたちが、「元患者」といいあらわされる現状がある[6)]。また、「入所者」ともいう。完治している、保菌者ではない、ということで「元患者」なのだろうが、わたしにはこの語への強い違和感がある。理由はかんたんで、すでにべつなところでも書いたとおり、癌、盲腸、虫歯、インフルエンザを患ったものたちが、それが治癒したのちに「元患者」といわれることがほぼないから。なぜ、ハンセン病にのみ、「元患者」

6) かつて NHK は「回復者」と表現していたことがある（『ETV 特集 2003』第 2 部「宿泊拒否―ハンセン病回復者の人権」NHK 教育、2004 年 3 月 13 日放送）。

ミセテ
あげる

の呼称が使われるのか、筋がとおった理由がないから。

また、「入所者」の語にもわたしは違和を感じる。確かに彼ら彼女たちは、その意思の有無や強制のどあいはともかくも、療養所に入ったものである。では出所についてはどうなっていたのかが、「入所者」の語からはわからないのである（予防法には退所規定がなかったと説明されたとしても）。それが可能であったのかどうか、その意思があったのかどうか、聞き入れられたのかどうか、は彼ら彼女たちの生(せい)を考えるにさいして重要な事項であると、わたしはおもう。もとより、では在園者といい換えたところで、園に在る-居ることをめぐる情報はその語だけでは乏しい。

ただこうしてみると、入院／退院、入所／退所、入園／退園と対になる語のその一方しか使われない奇妙さを考える余地を、これらの語は残しているともいえよう。あながち無意味な用語と捨てるわけにはゆかないかもしれない。それでもわたしは、入る、という方向性のある動詞を使うよりも、在る-居ることをめぐるようすをとらえ、それを考えたいので、在園者の語を用いている。

本稿では、NHK の（そしておおよそ一般の）用語にしたがって「元患者」の語を用い、略記するときは（元）とする。

応接室のような部屋でのインタヴュウにもどろう。（元）は、中学生のときに発病し、70 年以上も療養所で暮らしているとのこと（ナ）。そこで、爆 2 が「どんな思いで毎日？」と尋ねると、「そこはもう地獄の先の地獄でね、入ったら外へは出られない、死んでも家(うち)に帰れない」「患者もね差別受けたけども、やはり、我々は家族のことを思って、仮名(かめい)を使って、両親が眠るお墓も、お寺と檀家と反対されて公式にはお墓参りはいまだにできない」（元）と応じた。

（女）がすでに部屋にいたがカメラがとらえていなかったもうひとりの人物に、「おくさま」と声をかけ、夫婦のことへと話題をうつす――「そのけっこんにはじょうけんがあった、断種」（ナ）、「ふうふにこどもをつくらせない、ふにんしゅじゅつだ」「そのはいけいにははんせんびょうにかかったことがあるひとをおとったそんざいとみなし、ねだやしに

ミセテ
あげる

しようというしそうもあったという」（ナ。このとき（映）は、鍬かなにかを使うひと、松葉杖をもち傘をさすふたりの歩くひとを映す。ナレーションと映像とがくい違っている）。当事者は、「犬か猫のようにいー、去勢手術をされて、それだけはねえ、ほんとっに、いまでも、つらいですけど」（元）とのべた。

◆　ここで爆 1 がさらに尋ねる――「ここまでいたるまでは、やっぱり、こお恨みやなんか怒りってゆーのは原動力としてあったわけでしょ」。（元）の応答は、「ありますよ、日本の有数な医学者たちは「らいは治らない」と、患者だけじゃなくて家族も断種の対象に、手錠を掛けても療養所へ入れろ、こういう証言をね、せんきゅうひゃくごじゅういちねんじゅういちがつようか（医師が）国会でしたんですよ」「やはり我々が生きているうちに「らい予防法」だけはなんとしなくちゃいかんと」。

インタヴュウは、日本国憲法のもとでの予防法へとうつる。「きょうせいかくりをさだめた、らいよぼうほうのはいしをもとめて」「たたかいつづけた」（ナ）の（映）として、「らい予防法の過ちを繰り返すな！」のプラカードを掲げた若いころの（元）の写真が視せられる。当然のことだが、写真であれ動画であれ、そうした映像があれば、それにみあうナレーションを入れるのは、いともかんたんなことだ。「はいしがきまったとき、たたかいはごじゅうねんにおよんでいた。ながくつづいたふのれきし」（ナ）と、ここでも「負の歴史」との表現は紋切り型。文字において型どおりの表現であっても、「負の歴史」にみあう映像は、ない。

しかし闘いもこれで終わりとはならなかった。（元）たち資料館の建設を計画したひとたちには、「さらなるたたかいがまっていた」（ナ。ここに北條民雄『いのちの初夜』の本の映像。ここでもまたくい違いがある）というのである。その計画は、「みんなに反対されたんですよ」（元）、「ごかぞくに？」（女）、「いや仲間に」「なぜかっていったら、ハンセン病もう終わって誰もが忘れかけていると、それなのに昔にさかのぼってねえ、いろんな展示をするのはねえ逆行だと」（元）、「またより差別をより新たな差別を生むと」「ぼくはその

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

きもちはぜんぶわかるわけじゃないけども、うんざりするほど経験して、差別や何かへんけんやなにか、おれがもしそのなかまであったら、ちょっともういいよ、「もう静かに暮らそうや」ってゆー気持ちもわからなくはない」（爆 1）、「いやわかるんですよ、だからそれを、その人たちとケンカしなかったんです、それとけんかしたらできないよ、だってしょうすうだもん」「きょうりょくしゃがだんだんだんだんふえていった」「ものごとはケンカしちゃだめだと」「その基本はねえ、敵を味方にすること」「いつの日かわかってくれるだろうと」（元）。字幕もついた「そこでケンカして怨念を怨念で返したら明日はないと」いう（元）の言葉が、番組からの伝達事項（メッセージ）ということなのだろう。最後に（元）が、「よく考えてね、おたくたちも」とものべた。

◆　ただ、「これができないんだよなあー、おれ敵ばっかりつくってっからねえー」（爆 1）のおしゃべりといくにんもの笑いの重なりで、（元）のその言葉がきちんと考えられることなく、インタヴュウは終った。お笑い芸人が登場するからには、そういうものなのだろう。DEEP INSIDE とはいえ、あまり深刻になりすぎると重くていやなのだ。演じる側も、つくる側も、そして視る側も。

わたしは、（元）が語った「敵を味方にすること」という闘いの「基本」姿勢が気にとまった。もちろんわたしも、「敵ばっかりつくって」るような輩ではあるが、当事者のその言葉を笑いのなかに熔解させてはまずいとおもった。この稿をつくるきっかけのワークショップ ReD の活動をとおして聞いた、沖縄辺野古の「闘い」を「日本の民主主義を問う最前線」ととらえたひとの言葉に、「壁の向こうに味方をつくる」というひと言があった。最前線にはまた、「国家の剥きだしの暴力」があらわれる。基地建設反対派のカヌーが海上保安庁のボートによって転覆させられ負傷者がでる一方で、海面につらなる境界のフロートの越え方を反対派が「海猿」に教えたり、また、米軍基地のゲートまえに居並ぶ民間警備会社従業員と座り込み反対派とのあいだで、おそらく本土から派遣された警備員に暑さ対策を教えたりするなど、どう呼べばよいか、わたしには和合とでもいいたくなる短い交流が

ミセテ
あげる

あると、ディスカッションのときに教わった。

剥きだしの暴力の標的となれば、それは痛い。その痛苦の場をうまく制御しようとする、反対派のくふうと意思と耐忍とを、わたしは感じた。最前線をただの衝突の一線ととらえ、力を籠めてそこを突破しようとするのではなく、自分たちの力能と精神と展望にあわせて、前衛を理不尽な攻勢を削ぐ始まりの交渉場にするということだ。

「敵を味方にする」「壁の向こうに味方をつくる」――もとより難事ではあれ、それをしてきたものたちの言葉を継ぐ場を模索することを、忘れないようにしたい。

◆　「りょうようじょえりあへ」（ナ）と場面が移る。幾種もの花々が咲く単身者寮の庭の映像で、「お庭の手入れを丹精こめてしててておはなさかせているかたとか、まあいろんなたのしみをもちながらくらしてらっしゃる」とここでの暮らしぶりや、また、ふつうのアパートなどと違ってここには「お風呂がないんですね」（芸）との説明がある。花々は療養所生活にある楽しみの証ということだが、それはいまだからということなのか、過去はどうだったのか、それがわからない。後者はそれもまた、療養所の特殊性のあらわれということなのだろう。後遺症などで知覚が麻痺するから湯加減がわからず、きちんと湯の温度が管理された共同浴場でないと不都合があるからということだ。（映）で視せられる在園者の散歩風景。そこにはまたモザイクがかかる。「ここは、こうれいかやいまものこるへんけんからこきょうにかえれないひとたちの、ついのすみかだ」（ナ）とのこと。だがやはり、なぜモザイクなのかの説明はない。自明ということか？。もちろんわたしは、無遠慮になんでも撮って映せというのではない。

ついで園内をめぐり、「永代神社」と「宗教地区」へ。神社の説明のところで、（芸）の「ながよじんじゃ」との説明に爆 1 が「長与千種（ながよちぐさ）…」とぼけるが、ぜんぜんおもしろくない（さて、長与千種とはだれでしょう？。そう、ひとなのです。しかも女性)。笑えない。「しゅぅうきょうちく」（ナ）では、「入所した人は自分たちが死を意識していますから、将来どの宗教で送ってもらうかってゆーことを考えてるってゆーことで」「国立の施設なの

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

に、その宗教施設があるという、そういうばしょというのはハンセン病療養所を特徴づけている」（芸）との説明が入り、ついで、「さいごにいっこうがむかったのは」（ナ）、「一番重要なスポットになります、納骨堂です」「療養所の敷地の中に墓地がある」「ここで暮らしここで死ぬということ」（芸）。「のうこつどうには、にせんろっぴゃくにんがねむっている。ほねになってもこきょうのはかにははいれない、それが、いまもつづくげんじつだ」（ナ）と教えられる。

◆　納骨堂のまえで、（芸）によるその説明のさなかに、女の涙（右目）が一粒。嗚咽をおさえる雰囲気をいくらか残しながらの「いちばんいまやっぱりつたえたいせだい、わたしたちにはどういっためっせーじをとどけたいですか」（女）の問いに、「わかいひとたち」には、「もとかんじゃ」たちが「いま老境になって 80 歳を生きて、なおそれでもまだ自分たちのことを知ってほしいと願って、まあ生きている、それをまず知って欲しいですよね」「よくいわれるのは、無知が、あの、偏見をうむんだってゆーこと、で、知った自分は次どうするの？」（芸）との「メッセージ」が伝えられて、「おまいり」（女と爆 2）ということでみなが手をあわせる（映）。

「療養所はいま地域に開放されている」「ここで何があったのか知ってほしい」「知ったあなたに考え続けてほしい」（ジ）の背景には、多磨全生園園内にある保育園の園児たちの映像[7)] ——それが在園者の「願い」（ジ）とのこと。

さて、この番組のスタッフは、ナレーション木村昴、撮影小出寿顕、音声小平晃央、照明森山剛伸、映像デザイン鈴木哲、音響効果尾形香、編集高野益寿、リサーチャー今泉由香、プロデューサー齊藤倫雄、ディレクター足立美樹、制作統括亀山暁と示された（ジ）。

◆　2 つの番組のロケ地となった（というか、1 回のロケの撮影を 2 つの番組に使ったとい

7)「多磨全生園の入所者」と「交流を深めて」きた保育園が 2012 年 7 月に「全生園敷地の一角に園舎を建設し、移転」した（花さき保育園のホームページを参照。2015 年 7 月 9 日閲覧）。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

うことだけど）国立ハンセン病資料館ホームページの「新着情報」をみると（2015 年 7 月 3 日閲覧）、「2015/6/6 ハンセン病を知っていますか｜NHK「探検バクモン」放送されました。new／2015 年 6 月 10 日（水）午後 10：55～11：20 放送されました／2015 年 6 月 16 日（火）午後 4：25～4：50 再放送されました」と記されていた。「6/6」という日付と「放送されました」という述語がつながらずおかしい気がするが（6 月 6 日には放送されていないはずだから。念のため）。

それはともかく、ここにはまた、「悲劇の歴史が刻まれた都内の国立ハンセン病療養所へ。田中、恐怖の監禁室に潜入！太田、88 歳元患者の壮絶人生に迫る！今夜衝撃の事実が明らかに。差別とは？生きるとは？」と記されてある。これは本稿冒頭に引用した「番組情報」そのままである。『探検』が 2015 年 6 月 10 日夜に「明らかに」したという「衝撃の事実」なるものは、「ハンセン病に関する知識の普及や理解の促進に努める」ことをその「理念」の 1 つとする資料館（同館ホームページから）がこれまであきらかにしてこなかったことがらなのか？、それとも、「ハンセン病に関わる情報の受発信と集積を行う」という「情報センター機能」をもつ資料館（同館ホームページから）ならではの業務の成果として、『探検』という NHK の番組をとおして「衝撃の事実」を発信したということなのか？。もちろん「衝撃の事実が明らかに」なったのは「今夜」初めてだとはいっていないのだが、資料館はこの文章を館のホームページに掲載することになんの違和感もなかったのか、不思議に感じる。

NHK のホームページもみたところ（同前閲覧）、「過去探検記録」として番組にかかわる文章が掲載してあった。ここでとりあげた回の「探検場所」は「国立ハンセン病資料館」と「国立療養所多磨全生園」となっていた。ちなみに「探検」を『広辞苑』（第 6 版）でひくと、「未知のものなどを実地に探りしらべること。また、危険を冒して実地を探ること」とあった。出演者 3 名にとって、資料館も療養所も「未知」の場所だったのだろうから、そこを「実地に探りしらべる」のはよいとしても、どちらも「危険を冒して実地を探る」ほどのところではないはずだ。やはりこの番組のジャンルは「バラエティ」なのだろう。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

◆　さて、ホームページでは、「探検内容」「爆笑問題の探検報告」「ディレクター観戦後記」が公開されている。番組終了後にレポート（報告）を寄せるとは偉いもんだとおもったが、そこには写真しかなかった。ディレクターが「観」た「戦」とはなんだろう。興味津々。

「探検内容」は、「ハンセン病患者の悲劇の歴史を知るべく東京・東村山の国立ハンセン病療養所「多磨全生園」を訪ね」てみて、「隔離された「村」にも似た不思議な園内を歩」いて、資料館で「12 畳半に男性患者が 8 人、まるで囚人のように押し込められた「雑居部屋」」、そして「療養所独自の通貨の存在に驚く」という。爆 2 は「「重監房」に潜入」、爆 1 は「88 歳元患者」に「壮絶な人生を直撃取材。患者同士の結婚の条件だった不妊手術「断種」のエピソードに、思わず言葉を失う」とのこと。「さらに、今も 200 人の元患者が暮らす療養所の生活エリアへ。教会のすぐ隣に寺社、まか不思議な宗教地区が作られた理由とは？そして、療養所内に建てられた納骨堂に今も 2600 人もの遺骨が眠る理由とは？涙が止まらない、衝撃の事実が今夜明らかに」とのこと。

「不思議な園内」とは、「まか不思議な宗教地区」だけを指すのか？、「衝撃の事実」とは「涙が止まらない」ほどのことしか指さないのか？。どうも短文ではよくわからない「探検内容」である。ただ、やはり、「悲劇の歴史」を知って「涙が止まらない」というストーリーなのだということがよくわかった。

「ディレクター観戦後記」はいう――「偶然」をきっかけに「興味を持ち取材を始めると、あまりにも悲惨な事実があったことに衝撃を受けました」。それは「絶対隔離を定めた法律が 1996 年まで続いていたこと」「半ば強制的に行われていた不妊手術や中絶の事実」「「胎児標本」の存在」なのだが、「しかし、一番ショックだったのは、自宅のすぐ近くで起こっていた悲劇を、これまで「知らなかった」ことでした」と無知を恥じ入ることなく露わにした。とても素直なディレクターだ。そう嫌味をいいたくなるのも、法律の長期存続も、不妊手術、中絶、胎児標本のいずれもが、これまでに NHK が、NHK スペシャル、ETV 特集、クローズアップ現代、ニュースなどをとおして報じてきたことばかりなのだか

ミセテ
あげる

ら[8]。ディレクター氏はお若い方なのか。わたしは玄人の立場から、素人はなにも知らずこれだから困ると上から目線で非難しているのではない。NHK のディレクターが NHK のほかの番組を視ていないかのようすが不思議だっただけだ。もっともわたしも職場の同僚の研究を知らないのだが。

◆　「「知らない」「関係ない」あからさまな差別をしなくても、社会の無知や無関心にどれだけ多く傷つ(ま)られ(ま)てきたのか？自分自身に突きつけられている気がしました」とも記すのだが、「傷つられてきた」のがだれなのか（したがってまた、傷つけてきたのがだれなのかも）不明瞭な文だ。「観戦」とは戦闘や試合などを観ることをいうはずなのだが、いったこのディレクター氏はどういった戦いや競いあいを観たというのだろう。療養所や資料館内にどういう戦闘や試合があるのだろう――くりかえし文章を練りなおすなかで、ふとわかった、バクモンが「危険を冒して実地を探る」という戦い（インディージョーンズばり！）、そういう現場での爆 1 と爆 2 との競いあい（やじきた道中なみ！）、これをディレクターが観た、ということなのだ。合点了解――。療養所や資料館には表と裏があるのか？！、そこにこそ「潜入」しなくては！――DEEP INSIDE！。

　ところでこの番組はホームページによると、「「普段は入れないところに潜入し、／外からはうかがい知れないディープな裏側を探りだせ！／爆笑問題が繰り広げる、知の大活劇。／世界のフシギを笑いのうちに解明していく、／教養エンターテインメント番組「探検バクモン」」という趣旨でつくられているようだ（やっぱり「裏」があるのだ！）。もちろん展示の「特別病室」内に入ることは普段だれにもできないが、国立ハンセン病資料館にも国立療養所多磨全生園の宗教地区や納骨堂にも普段からだれでも入ることができる。それとこの番組は、「教養エンターテインメント」とのこと。「バラエティ」ではないのであれば、教養娯楽？、教養演芸？、教養余興？。教養娯楽にしよう。教養娯楽 DEEP INSIDE『探検バクモン』！。

---

[8]管見のかぎりでのハンセン病をめぐるテレビ・ドキュメンタリの一覧をうしろに載せた。
ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

◆　「ハンセン病を知っていますか」と『探検』は視聴者に問う。これは知らないひとには教えましょう、知っているひともこんなようすは知っていますか、知らないでしょう、という態度である。なにを知らせるか――それは、「悲劇」「壮絶」「謎」である。療養所であるにもかかわらず、刑務所のようなと喩えられる苛酷な環境で、実際に「監禁施設」があったのだから、喩えどころではなかったということだ。それらのようすはいまや過去のものとなり、資料館の展示のなかにしか残ってはいない。だが館の外にでて、療養所のなかに深く分け入ってみれば、やはり奇妙な空間となっていると番組は視せている。

学芸員は苛酷な環境が「永遠に続く」といい、当事者もまた療養所は「もう地獄の先の地獄でね、入ったら外へは出られない、死んでも家(うち)に帰れない」と証言する。確かに予防法が廃止されたいまでも多くの療養所在園者の遺骨が故郷へ帰れない。こうして「悲劇」「壮絶」のどあいがますます強められてゆく。療養所である、にもかかわらず、刑務所のような、と喩えられて、苛酷さがいっそう強調されるのだが、逆接の接続詞のまえにおかれた療養所のようすがきちんととらえられ、理解され、それが伝えられることが弱まってしまう[9)]。ほんとうに療養者たちは、「永遠に続く」「地獄」を生きたのか？。当事者が抱く「地獄」の苦難を手離さずに、観察者はもっと冷徹に療養所とそこに生きた療養者の生を視なければならないとわたしはおもう。

専門学芸員すらもが、「地獄」が「永遠に続く」としか療養所のようすをいいあらわせないのだとしたら、そうした資料館の外部評価はいちじるしく 0 にちかづく。こうすると評価をだれかに委ねたようになってしまうからきちんといいなおすと、そうした資料館をわたしは評価しない。「教養エンターテインメント」にあわせたというのであれば、そうしたお座敷芸も身過ぎ世過ぎのうえでは仕方ないと開き直ればよい。あるいは、当事者がそういうのだから、とそこを根拠とするのであれば、それもよい。ただそうなれば資料館に学

9) こうしたハンセン病をめぐる記述の型とそれへの批評については、前掲阿部『透過する隔離』を参照。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

芸員はいらない。当事者がいればよいのだから。

◆　また、登場人物の役割はなんだったのか。この番組に必要だったのは、当事者の「元患者」と、（女）のふたりだけではなかったか。前者は苛酷さを証言し、後者はそれをうけとめた涙を流す。前者の生はその苛酷な部分だけが番組では活かされ、後者はその性と分泌液だけが必要とされた。

そして映像は、当事者の声と（女）の性と涙を写しとるための道具にとどまった。もちろん資料館の展示や療養所内の施設や花々を視せてはいた。だがそれらはどれも、そこにゆけばだれもが視られる。映像には過去の動画や写真も用いられたが、それらは番組のストーリーとは無縁なただの挿画、背景、お目々直し（お口直しの転用）にすぎなかった。過去の動画や写真がもっていたであろうそれぞれのアイデンティティが剥奪されている。それぞれの動画や写真にはそれぞれに固有の意味があったはずなのだが、それには目配せすらされずにただ流されてしまった。

そこにゆかずとも、そこを視られる――これがテレビ番組の役割か。でも、「DEEP INSIDE」だからよいのか。ぜんぜん「DEEP」ではないのだが。高度技術による高性能を装った望遠鏡をわたしたちは日々ありがたがって視ているのかもしれない。Peep Inside？

ところで、試みとしてさきに、番組のナレーションなど音声部分を筆記するにあたって漢字を用いずに仮名だけとしてみた。こうも読みにくいものか。それにくらべると、わたしたちは音声を聞いて、瞬時になにをいっているのかを判断しているのだろう。わたしたちは、漢字、仮名、カナ、アルファベットの文字に日々慣れ親しみ、それゆえにかえって、たとえばかなだけでしるされたりカナダケデシルサレタリスルト、却って読みにくく成っていると言う事なのだろうか。だが、音（おと）として、さぁっきまでおぉれひっとりあんたおもいだしてったとっきぃしゃいなはぁーとにるーじゅのいぃろがたぁだぁうぅかぁぶぅすきにぃぃならずにいられぇなぁいぃおめにぃかぁかぁれてえ、というフレーズを聞いても、その言葉を聞き分けているのだろう。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

◆　『HNTV』は「シリーズ戦後 70 年」を組み、その第 1 回が「障害者はどう生きてきたか」（2015 年 1 月 5 日放送）、第 2 回「高齢者をどう支えてきたか」（同年 1 月 6 日放送）、第 3 回「家なき子たちの戦後―戦争孤児から虐待まで」（同年 6 月 2 日放送）、第 4 回「精神障害者たちの戦後―病院か地域か」（同年 6 月 3 日放送）、そして第 5 回の主題がハンセン病となった。

その冒頭は、「NHK 特別解説員／ふくにゃん」によるつぎの科白にはじまる（ここでは転記にさいして漢字使用）――

みなさ～ん、きょうはちょっと不思議な場所をご案内するわよ～、ここはハンセン病の元患者さんたちが暮らす療養所、多磨全生園よ、東京ドーム 7 つ分もの広さがあるの、ハンセン病ってご存知かしら？、らい菌ってゆう菌に感染して起こる病気よ、療養所の中には教会やお寺もあるし、売店や郵便局、かつては映画館まであったのよお～、どうしてこんなに何でもそろってるのかって、じつはこれがハンセン病の長い歴史を物語っているの。

――「戦後 70 年」のあいだに日本国民が得た幼児化が如実にあらわれた科白（だと感じたのだが、番組ホームページによると NHK 特別解説員の年齢は「詳しいことは不明だが、70 歳以上」という。とうてい信じられない）で、「ちょっと不思議な場所」としてハンセン病の療養所が紹介されている。一転、このシリーズとその第 5 回の趣旨が NHK らしいナレーションによって語られる。

過去の歴史をひもとき、未来へのヒントを探るシリーズ戦後 70 年、第 5 回はハンセン病の戦後です。治る病となった後も戦後 50 年にわたり続いた隔離政策、患者たちは療養所で一生を終えることを余儀なくされました。激しい差別や偏見にもさらされます。抑圧的な隔離政策の廃止を求めて立ち上がった患者たち。‘人間らしく生きたい’、強い思いがありました。差別や偏見の中、自由をどう勝ち取っていったのか、人間回復への道のりをたどります。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

――出演は「キャスター」と「タレント・女優」(『探検』にも出演。この番組ではやがて氏名が字幕で示される)と「ハンセン病元患者」「NHK 特別解説員」の 4 名(以下順に(キ)(女)(元)(解)とする)。といっても(解)はアニメーションの(たぶん)猫である。

◆　(キ)が、戦後 70 年なので、1 年をとおして戦後の福祉を考える、「きょうはハンセン病の戦後を振り返ります」と口上をのべ、(キ)にハンセン病を知っているかと尋ねられた(女)は、

はい、あの正直なこというと、ハンセン病っていうのは聞いたことはあったんですけども、いったいどういう病気なのか、いったいどういうものなのかってゆーのは、ついこないだまでわたし知らなかったんですよ、とある番組でちょっとあの実際に勉強させてもらったんですけれども、知ることができてよかったなとまず、いま思っております。

と応じた。正直な告白も「とある番組」を知らなければ聞き流されてしまうだろう。それはさきにみた『探検』である。

ついでクイズとなる――つぎのうち正しいものはどれ、「1. 感染力が弱い／2. 遺伝しない／3. 死因にならない／4. ほとんどの人は発症しない」。正解は全部。(解)が「日本でふつーに暮らしていて、発症することはないの、しかも特効薬もあるのよ、家から病院に通って治せる病気なんですよね」と説き、「人の眼につくところに、いろんな後遺症できるんで、これが誤解の元なんですね」(元)と教えた。

ハンセン病の歴史をふりかえるにあたって、出演の「元患者」がそれぞれの時代に「経験」してきたことを「3 つのキーワードにまとめた」(キ)とのこと。

◆　①1950 年代「自由を奪われて」(ジ)＝「〔「元患者」が〕経験した隔離の歴史」(キ)。出演者が生活する場(療養所内の寮)の映像が流れ、眼や手足などからだの一部に後遺症が残ることなどがナレーションで伝えられる。

1931 年癩予防法で発症者全員が強制隔離、1940 年代米国での特効薬プロミンの開発、治

ミセテ
あげる

るようになるが国は隔離政策をかえない、治療が可能になったのちに発症したばあいでも療養所に入らざるを得なかった、といった内容を伝えるナレーションが入る。

「やはり、あのお、治る薬が、あったわけですよね、で治る病気だったにもかかわらず、あのように隔離されなければいけないでも、なぜそれを隔離されなければいけなかったのかという、ほんとに単純にその疑問しか出てこないんですけども」（女）、法律があった、退所する基準がない、などの説明が（元）からあり、隔離のときの気持ち、心境は？（女）と尋ねられ、「こんな、ハンセン病だったら死んだほうがいいんじゃないかって、なんど思ったかわかりません」（元）と応えた。

厳しい隔離政策が社会の偏見を煽ることとなった、無癩県運動が展開し、それが戦後も残り、感染力の強い不治の病というイメージが定着、発病したら二度と社会にもどれない、恐怖感が差別を助長させた、とナレーション。

「正しい知識がないがゆえに起きている出来事ですよね」（女）、「家族もほんともお一苦労したんですよね、わたしのためにはねえ、ええ」（元）。

②1960－1980 年代「普通の暮らしを求めて」。「もう犯罪人みたいな気分だったね、園から外に行くということは」（元）、それでも予備校にかよい大学に合格したが、「らい病患者が大学に行ってどうする」（ナ）ともいわれたとのこと。

ここで過去の番組が参照される（NHK スペシャル／「ハンセン病・隔離はこうして続けられた」／2001 年放送）。「こうした隔離政策はなぜ続いたのか」（ナ）を、「元国立療養所所長」に語らせる――「患者さんってのは（外に出ても）ホームレスになるってゆーんですよ、結局患者さんってのは家（うち）にいても、ひどくなれば家にいられないって、ねえ、いろんな村八分になったり、だいたい家族がね、影響がある、子どもや兄弟に、親に、あ、あれの、あすこには、ハンセン病がいるよってことになって」。

「療養所で一生を終えることが患者や家族にとって最善だという考えが根底にあったのです」「国は患者の求めに応じて療養所の娯楽や医療を充実させていきます。暮らしが日増しによくなるなか、隔離政策への疑問を感じる人が少なくなっていきました」（ナ）との説

明もくわわる。

「元患者」の夫婦は、子どもがほしいと願っていたが、優生保護法、断種手術、療養所の生活が改善されるとともに権利の制限をうけいれるひとがでると、その願いに対して「まわりの仲間は激しく非難したといいます」（ナ）。これに、「心苦しいですよ」（女）、「そのみなさん〔「仲間」〕から反対されたわけじゃないですか」（キ）と応答があり、「マインドコントロール」「国の政策によって」（元）と説かれ、「我々ハンセン病に対しては、社会の人はねえ、けして理解していない、いろんな誤解がある、だから、もう療養所にいた方が、安心だし、えー生活も安定しているから、いいんじゃないかと、こー思ってると、正直な気持ちだと思いますよ、そういう人をねえ、批判することわたしできないと思います、なぜなら、そういうふうに、あの、国からそういうふうに、し、まあ仕込まれたってゆーか、そういうふうにまあ教育されたんですよね」（元）とのうったえがある。

ここで、「全国の国立ハンセン病療養所」の地図、が示され、あわせて「入所者 1,718 人」「平均年齢 83.9 歳」「2015 年 5 月現在」と視せられ、「いまさらただいまあって故郷に帰るってことはねとてもできない、そういう現実はね、ずっと続いてるんですよね、今でもね」（元）と療養所の現状が告げられた。

◆　③1990 年代－現在「人間回復を目指して」。「隔離された生活になかば諦めの気持ちでいた」ところに、「大きな変化がおとずれます」（キ）との前口上。

全国の自治会長があつまる会議で、「元厚生官僚」から予防法を廃止すべきという発言があり、半世紀以上続いた政策が大転換することとなったとナレーション。その発言者が「弱い立場に置かれた人たちの、集団っていうなものは、結局永久にそういうふうに葬り去られるとゆう危険性がある」と語るインタヴュウ映像が流れる。これをうけて、「いきなりねえ、廃止しましょうよと、ゆういったときにはねえ、なんかびっくりしましたよね」「予防法が無くなるってことはね、我々当事者も家族もきっと喜ぶにちがいない」（元）と語る。だが、多くの「入所者」が「予防法廃止に反対」、療養所がなくなりいき場を失うことを怖

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

れた、そこで反対者を説得して、政府に隔離政策の過ちを認めるよう要求した、1996 予防法廃止、戦後 50 年つづいた隔離政策が終わった、とナレーション。「多磨全生園でもねえ、おそらく 8 割から 9 割ぐらいは反対だったと思います」（元）と明かされる。

幕間のように 5 秒間だけ、園内を散歩するであろうひとの映像が流れる。ただしモザイクがかかる。

予防法廃止後に出演者に姉からの手紙が届く――「私を、兄弟と思わないでください、一切お断りします」（元）、「ハンセン病の家族がいることを周囲に知られたくないと綴った姉からの手紙」（ナ）だった。「姉さんはねえ、自分の旦那にも私の病気を言えなかったし、子どもたちにも言ってないし、そういうことでもしばれたら、自分の主人と自分の子どもたちの人間関係がおかしくなるんじゃないかと、やっぱり、こわ、怖かったんでしょうね」（元）と姉の気持ちを忖度し、「法律がなくなったからって、一般にさーっとみんなるかというと、やっぱそうはなりませんね」（元）と偏見の存続と家族の再生困難を語る。「法律が廃止されても根強い偏見は変わっていない」（ナ）。

国に謝罪を求める裁判に原告として参加することを決めた、「裁判を通して社会の偏見を解消したい、人間回復を目指したのです」（ナ）と出演者のその後の行動を紹介。2001 年にその裁判で国の責任を認める判決がでたとナレーション。原告勝訴をうけて、「ようやく人間になりました」（映像）、そのときその場で、この番組出演の「元患者」が「この勝利は、良識ある日本国民の勝利だと思っています」「いろんな偏見差別の問題でいま苦しんでいるひとたちの闘いが始まったととらえるべきだろうと思うんです、がんばりましょう」と語る映像も流れた。

「すごい闘いがあって、ほんとはそのきっと、ね、も、多くの、この状況を、この法律がなくなったというのを、見届けることができなかった患者さんもたくさんいたわけじゃないですか、ほんとにいろんな思いで闘われて」（女）の言葉に、「ほんとに人間回復ですよ」「〔あのときの発言は〕いまでもそれは間違ったと思っていませんね」「けしてハンセン病の問題はねまだ終ってないんですよね」（元）と語った。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

◆　ここで両番組の「モザイク」にふれておこう。『探検』では 10.05～10.16 の映像で[10)]、療養所内とおもわれる場所を歩く人びとの姿にモザイクがかかっている。ただしそれはみな後ろ姿で、しかもモザイクありとなしとがある。モザイクの有無についてナレーションであれ字幕であれ説明はない。後ろ姿にモザイクをかけなければならない理由も、なぜモザイクをかけなくてもよいひとがいるのかも、わからない。

両番組では、過去の映像（動画も写真も）やニュース映像を使うにさいして、そこにモザイクはいっさいなかった。『探検』19.10～19.17 の映像でも後ろ姿が映るふたりにモザイクがかかり、やはり 24.00～24.06 の映像でも自転車に乗るひとりの人物の後ろ姿と、そのまえを横切る自転車に乗る人物にもモザイクをかけていた。自転車のひとふたりは、療養所在園者かどうかもわからない。そのつぎの場面に映る多くの園児たち（当人もその親も療養所在住者ではないはず）のだれにもモザイクはかかっていない。

在園者とおもわれるひとの正面の姿は、『探検』19.18～19.26 にひとり電動車椅子に乗った映像にだけあった。ここでもモザイクはかかっていた。ただモザイクをかけなかったからといって、その人物がだれなのかはっきりとわかる距離での撮影かどうかは微妙なところだった。

『HNTV』では、過去の映像はもとより、現在の療養所での職員による配膳、在園者が囲碁をする-散歩をする（後ろ姿）-自転車に乗る（後ろ姿）-車椅子に乗る（正面、サングラス着用）ようすのすべてにモザイクがなかった。ただし、在園者のようすはこの番組のために撮った映像ではなく、べつな番組の取材だったかもしれない。番組の最後の方での園内ガイドのようすでも、いっさいモザイクがなかった。この番組ではたった 1 か所、22.58～23.02 の映像で、園内を歩くひとの後ろ姿にモザイクがかかっていた。在園者に対する画像処理なのかはわからない。

---

10) 書籍のページ数のようにテレビ・ドキュメンタリの時間帯を示す。これは番組開始から 10 分 5 秒から 10 分 16 秒までのあいだをあらわす。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

両番組ともに、なぜモザイク処理をしなければならないのかがわからない。考えられる理由は、後ろ姿であろうと在園者でなかろうと、なんであれ被写体が写ったままの放送をいやがったからか、あるいは、過去の映像を用いようとしたところやはり当人の許可を得られなかったからか（当人の意思をもはや確認できないこともふくめて）。

◆　どれもほんの数秒の映像だから、視聴者にはモザイクがかかっていることしかわからず、どういう場面でどういう姿にかけたモザイクなのか確かめる時間がなかったかもしれない。視聴者はまるで気にしないか、かなり気になるか、どちらかの反応となるだろう。当初は気にしなかったものも、なにかの拍子でもういちど、あるいはくりかえし番組の録画をみたときモザイクに気づくかもしれない。なんであれモザイクを不思議におもった視聴者がいたばあい、それは、制作者が映像に確固とした徴（しるし）をつけたこととなる。被写体当人の意に反した映像を放送することはできないだろうが、それでもこれは、制作者が刻印した徴である。それが被写体当人の権利を保護したり同人への不当な圧迫を回避したりするための処理だとしても、これは制作者が被写体にくわえた表現の徴なのである。

この徴は、社会通念や一般常識にしたがった印や証でもある。それは人権への配慮であり、他方で、対立の回避でもあり、それによって問題を視えなくしてしまったともいえる。どういった問題が視えなくなったのか――それはかつてハンセン病者を特定の施設に隔離して社会から視えなくしてしまったことをなぞっているようすの不可視化である。いまカメラは療養所内に入り、療養所のようすを写し、それを家庭などのテレビに映しだしている。こうしてメディアをとおして療養所が開放されながらも、しかしそこにいるひとたちの一部が隠されている。依然として療養所内にいるものたちの一部が、社会から視えなくされているのである。それが在園者ではないかもしれなくても、また、後ろ姿であっても、なのだ。

顔を視せてはいけないのか、だれなのかわかってはならないのか、そうした疑問に映像は直截には応じていない。むしろ映像は、後ろ姿にもモザイクをかけることで、そこにこ

ミセテ
あげる

そ問題があるとはっきりと示しているといえる。そして、そうした処理をしながらも、制作者側は提示した問題にまるでかかわらない姿勢を視聴者に視せてもいる。これは視聴者に考える余地をあたえたなどという配慮や仕掛けではない。なにも考えずに、ただ慣例にしたがって、あるいは、当事者の意にただあわせて、モザイクをかけたにすぎないのだ。

くりかえせばこれは、モザイクをかけられた側にその理由があるのではなく、あくまで、映像処理をした制作者にこそ問うべきことがらがあり、しかもそれをきちんと考えていないことを明らかにしているのである。とりわけ後ろ姿へのモザイクとは、そうした徴なのである。

◆　まとめとなるのだろう、（キ）が「この 3 日間をとおしてえ、〔中略〕どんなことを感じましたか」と（女）に発言をうながす（このシリーズの第 3 回～第 5 回を放送した 6 月 2 日～4 日の 3 日間ということ）――「知ろうとしなかったことがいけないこと」「次の世代にちゃんと渡していく」（女）とのべた。

出演者が園内ガイドをする映像、多磨全生園の納骨堂のまえへ――「若者たちに患者たちがたどった歴史を伝え続けている」「必ず案内するのは療養所内の納骨堂」「故郷に帰ることを許されなかった 2600 人が眠る」（ジ）――手をあわせる人びとの映像。

「今日かぎりのハンセン病問題じゃないんですよね、ずうーっとこれからもいろんなところでハンセン病問題を勉強されてですね、偏見差別の問題に特に生かしてほしいの、いろんな差別問題があるんじゃないの、日本にね、そういうことを勉強することによってね、みなさん、日頃の生活に生かしてほしいんですよね、それがねえ、我々の、あの、使命なの」（元）――これが番組からの最終伝達事項ということだろう。

これをつくったスタッフについては、番組内では示されなかった。番組冒頭のナレーションにあった「ちょっと不思議な場所」とは、「何でもそろってる」ことにつきるのか。「不思議な」とは『探検』と『HNTV』の両方で用いられながらも、じつによくわからない形容だった。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

今年 2015 年にあちこちでいわれている「戦後 70 年」という節目ゆえにつくられたシリーズの 1 つとはいえ、ハンセン病をめぐる予防体制は 20 世紀初頭にはじまるのだから、1945 年以前をとりあげざるを得ず、この番組ではそうした目配りがなされていた。「ハンセン病の戦後」（キ）という区切りを設けると、すでに 1940 年代に開発された特効薬の普及とそれによる可治化と、1945 年の敗戦によって日本国民が得た日本国憲法が保障する人権をふまえて「ハンセン病の戦後」を論じることとなるはずだ。「治る病となった後も戦後 50 年にわたり続いた隔離政策」（ナ）についての説明が必要となる。それはいかに。

◆　この番組ではそれを、過去の番組を借用して、「元国立療養所所長」の医師に語らせた。それは、当事者への配慮ゆえ、というもの。医師が病者の人権を守るために療養所のなかで保護したというわけだ。これで「ハンセン病の戦後」を説いたことになるのか。

出演した、当事者である、「元患者」と呼ばれてしまう男性は、この件については明瞭に応答していない。ただ、治る病となったのちも依然として「社会」の人びとのあいだに「誤解」が残り、それだからこそ、療養所内での「安心」や「生活の安定」を望むひとたちを「批判」することはできないといい、また、そうした「誤解」、もっといえば無理解や理不尽な拒絶を彼は、予防法廃止後においても自分の姉からうけていた、と手紙という証拠をもって視せていたのだった。

「ハンセン病の戦後」を記したりあらわしたりするとき、特効薬によってハンセン病が治る病になり、日本国憲法によって日本国民は主権と人権の保障とを得た、それにもかかわらず、依然としてハンセン病に罹ったもの、罹ったのちに治ったものが隔離されなくてはならなかったのか、を説かなくてはならなくなる。それを『HNTV』第 5 回は、「ハンセン病の戦後」の経緯や展開を視せたかもしれないが、しかし、さきにあげた「ハンセン病の戦後」についての重要な課題は、解き明かしてはいないのである。

この点については、最後にまたのべるとしよう。

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

◆　さて、この番組にもホームページがあった（2015 年 7 月 4 日閲覧）。『HNTV』とは、「「生きづらさ」を抱える全ての人に向けた新しいスタイルの福祉番組」とのこと。「新しいスタイル」とは、たとえば「NHK 特別解説員」を委嘱された、70 歳をこえた高齢の「ふくにゃん」を登場させることにあらわれているということか。

番組のおそらく趣旨も視せられている――「日本の福祉の課題を紐解いていくとその特徴に、「（自分たちと違う人は）地域で暮らすのではなく隔離・収容する」という発想が浮き上がってきます」といい、その「最たる例がハンセン病に対する政策でした」と示される。登場した当事者による、「病気への無理解や根強い偏見、患者の自由や人権より制度の存続が目的になったことなどが重なり隔離は続いた」との見解も視せる。「そしてそれは「ハンセン病に限ったことではない」とも」彼がいうので、「隔離収容の歴史とそのことがもたらしてきた課題を見つめ未来へのヒントを探ります」と、番組の課題が掲げられた。

「番組まるごとテキスト」と題されたとても便利なページや、出演した（女）と（元）へのインタヴュウもある。

出演した（女）のインタヴュウ（6 月 1 日時点）には、「ハンセン病政策の歴史。二度と繰り返さぬように」の見出しがついている。質問 1「今回は「ハンセン病」の戦後の歴史を振り返りましたが、収録を通してどのようなことを感じましたか」――応答 1：「ハンセン病の当事者だった方の生の声を聞くと、本当に計り知れないくらい長い年月を戦ってきたんだなと思いました」、2001 年いわゆる国賠訴訟勝訴時の「やっと人間になれた」の言葉が「すごく印象に残っています」、「ひとつの偏った情報をみんなが鵜呑みにしてしまったからこそハンセン病の当事者はあれだけ苦しみました」、「その政策が 1996 年まで存在していたと考えると、きっと私たちが知らないところでまだまだ苦しんでいる人、解決されていない問題がたくさんあると思うし、学校では学べないこともたくさんあるんだなと感じました」。

質問 2「完治する病気になったにもかかわらず、なかなか法律でそれを認めなかったという歴史もありました」――応答 2：「感染力が強いわけでもない、遺伝もしない、本当は治

ミセテ
あげる

る病気だったにもかかわらず、国が偏見を持ち、ちゃんとした情報を出さなかったことで、外に出ることなく亡くなってしまった命もたくさんあったはず。そう思うとすごく複雑です……」。

質問 3 出演した（元）の「話の中のなか〔ママ〕で特に胸を打ったエピソードはありますか」――応答 3：「それが後にわかったときの衝撃〔実験中の新薬の副作用で子どもができなくなってしまったこと〕は、きっと私たちには想像できない痛みだと思います」、「〔離婚や自殺を考えたが〕でも、今は生きようと前向きに生活されている〔中略〕本当に強い人だなと感じます。こういう方がいたからこそ、ハンセン病の事実が浮き彫りになったのだと思いました」。

質問 4「ハンセン病療養所に住む方の平均年齢は 84 歳。この歴史を受け止め、語り継いでいくことの意味はどのように感じましたか」――応答 4：「語り手がいなくなるとそこで歴史が終わるわけではありません。事実は消すことはできない。だからこそ私たちには理解して伝えていく役割があるし、同じようなことが二度と起こらないようにするための意識を持つことが大切だと思います」。

このインタヴュウへ「コメント」は寄せられていなかった。

◆　出演した当事者への質問は 2 点あり（6 月 1 日時点）、「今回は「ハンセン病」の戦後の歴史を振り返りましたが、収録を通してどのようなことを感じましたか」と「視聴者の方には番組を通してどのようなことを感じてほしいですか」で、後者に対しての応答は、「世の中にはいろんな差別や偏見があります。もちろんそれは人間が作ったものだから、壊せるのもまた人間です。だた〔ママ〕、それは当事者が中心にならなければ壊すことができないと私はずっと思ってきました。〔中略〕やっぱり当事者が動かないと、世の中は動きませんよ」。

これへの「コメント」が 4 件。投稿順にあげると、1 つは、「「癩」と言われていた時から本当に皆んな〔ママ〕の感じ方は変わったのだろうかと正直思います。結局当事者が辛い思いをしながら運動しなければならなかった事実。様々な不公正にせめて自分の中で改革していき

たいと思います」との決意を表明。

2 つめは、昨年に神谷美恵子の本を読んでハンセン病を知り、「なぜ、ハンセン病を患った人が、このようなことになってしまったのか？」を知るために「長島愛生園に 3 回ほど通い、学ばせていただいています」という投稿者はまた、家族がパーキンソン病に罹り、「本人も家族もとても辛い目になることを経験し〔中略〕病になった人が、普通の生活や普通の幸せから、絶望に滑り落ちてしまう。私は、どうすればそこから立ち直れるのか？の解決法が〔中略〕たくさんのハンセン病に苦しまれた方々の力強く生きてこられた人生から学べることがあると思い〔中略〕私は、この学びを、今の社会にどう活かしていけるのか、真剣に考えたいと思います」との決意表明。この投稿者はまた、当事者の「私達の経験を活かしてください」の言葉が「心にとても響」いたという。

3 つめは、「最近、映画「あん」をみて、初めてハンセン病について調べ」たという投稿者で、「今まで本当に気にしていなかったけど、もっと知らないといけないと真剣に思っています。たまたまテレビをつけたら、ハートネット TV をしていて、興味深かったです。興味という言葉は、一生懸命活動されている方々に失礼なのかもしれませんが、自分なりに調べていきたいです」とこれまた決意表明。

4 つめは、子どもたちが「すでにハンセン病の存在すら知りません」という世代の投稿者が、「このような過ちを繰り返さない為にも、このような差別が行われていたという事実〔中略〕それに立ち向かわれた方々の存在を後世に伝えていく事もまた、大切」だと記していた。

いずれの「コメント」も 6 月 4 日付だったから初回放送当日の投稿で、しかもその日かぎりであとは途絶えたこととなる（7 月 5 日以降の投稿の有無は未確認。なお、第 4 の「コメント」は冒頭に「再放送で見させていただきまいた〔ママ〕」と記されながら、投稿日時が「2015 年 06 月 04 日（木曜日）23 時 53 分」となっている。くりかえせば再放送は 6 月 11 日）。

「コメント」は学生のレポートに似ている。知らないことを知れてよかった、ハンセン病の歴史について興味をもったので、もっと調べようとおもいます。そうおもって調べた

ミセテ
あげる

ReD は記録の仕組みを問います。

ことを記述するのがレポートだとおもうのだが、気合の入った（かのような）決意表明（したいことはこれです）にとどまる。こんなにも前向きなわたしを視てください、それを評価してください、ということか。

◆　「このような過ちを繰り返さない」「同じようなことが二度と起こらないようにする」というとき、「このような過ち」「同じようなこと」とは、厳密にはなにを指すのか。それらを、いつ以降に、くりかえさない、二度と起こらないようにする、というのだろうか？。「過ち」や「同じようなこと」が起こった最後はいつだというのだろう。こうした決意表明はまた、戦争をめぐる立言に似ている。だいたいよく知られた、広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑。1952 年 8 月 6 日設立）の碑文にしても、「過ちは繰返しませぬから」なのだから（ここにいう、くりかえさない、というその目的語は「戦争」とのこと。広島市ホームページより。2015 年 8 月 4 日閲覧）。1945 年以降も 1952 年以降も、世界で戦争を起しているのだから、人類はこの広島の誓いを破ってきていることとなる。

ひとを差別しない、抑圧しない、ということであれば、ハンセン病をめぐってだれかがしばしば誓っていることもまた、つねに、破られている。いわれなき差別をしない、不当なあつかいをしない、ということでもおなじだ。こうした誓いは、それをたててもかならず破る、ひとの愚かさを確かめるためにあるのだろうか。しかも、ハンセン病であれ戦争であれ、その当事者や体験者が減ってきているいま、あらためてこうした当事者ではないものによる誓いをみると、それがとても身勝手にみえてしまう。非当事者や未体験者が、自分たちはそれを蒙りたくない、といっているにすぎなくもあるからだ。愚行をくりかえすと自分も被害者になる、おなじことが起こればわたしが死んだり傷ついたりする、自分たちの子どもの安心安全を将来にわたって守りたい、だから、そうならないであってほしい――これは誓いなどではなく、ただの願望だったのか。ならば、いつでも、かんたんに、唱えることができる。しかし、それでは効力の弱いお呪（まじな）いだ。

くりかえさない、二度と起こらないようにする、というとき、「悲劇」と形容できる「負

ミセテ
あげる

の歴史」がありさえすればよい。そこで当事者がどう生きたかは、あまり問われない。「壮絶の人生」だとわかればそれでよい。それはいやだ、味わいたくない、わたしたちはかかわりたくない、だから、そういう「負の歴史」はくりかえしたくない、ふたたび起こってほしくない、ということだ。

なぜ「負の歴史」が生じたのか、をめぐっても深く考えぬかれはしない。『HNTV』のブログもせいぜい「患者の自由や人権より制度の存続が目的になったことなどが重なり隔離は続いた」というていどで納得している。でもこれは堂々めぐりの説明ではないか。法によってさだめられた隔離は制度にほかならない。なぜそうした隔離制度がつづいたのかと問うて、「制度の存続が目的になった」からといっても、それではなにも答えていない、考えていないこととなる。

◆　今回の『HNTV』でのハンセン病のとりあげ方は、くりかえせば、「治る病となった後も戦後 50 年にわたり続いた隔離政策」をどのように説明するのかが、ひとつの重要な論点となっていた。では、これまで、テレビ・ドキュメンタリはそれをどうあつかってきたのだろうか。少なくとも、NHK はどういう番組を放送してきたか。

たとえば NHK は過去に、つぎの番組を放送していた。

①「シリーズ ハンセン病訴訟 何が問われているのか 前編 隔離政策はこうして続けられた」『ETV2001』NHK 教育、2001 年 5 月 28 日放送。

②「ハンセン病 隔離はこうして続けられた」『NHK スペシャル』NHK 総合、2001 年 6 月 16 日放送（①の前編後編のダイジェスト版といってよい）。

③「宿泊拒否 ハンセン病回復者の人権」『ETV2003』NHK 教育、2004 年 3 月 13 日放送。

①②はまさに番組タイトルで、隔離の継続を問うとうたっている。これらの番組の確認は、べつな機会としよう。

2015 年 6 月放送の 2 つの番組で、なぜ隔離が継続されたのかは明快に説かれていなかっ

たのだから、おそらく過去の番組においてもそうなのだろうが、しかし、少なくとも 2001 年放送の 2 番組はともに似た文言で課題を提示していたのだから、なにかしらの表現はしているはずだ。しかも①は、『HNTV』第 5 回において参照された番組だった。

映像でハンセン病をめぐる問題や課題を表現しようとするとき、2015 年 6 月放送の NHK 番組は、なにを成し得たのだろうか。わたしにはそれがみつからなかった。

［　附 記　］この原稿をかかえたまま 7 月 4 日に、国立療養所大島青松園がある香川県の大島にわたった。今年 2015 年の 5 月と 6 月は、いちども島にでかけなかった。まるまる 2 か月も訪問のあいだが空いてしまったことはずいぶんとひさしぶりだったようにおもう。

いつものとおり在園者のおひとりが迎えてくださったのだが、桟橋の袂にたつその場所がいつもとは違っていた。

帰り際に彼は、アルバムを 1 冊持ってきた。そこには花々の写真がおさめてあった。望遠レンズやマクロレンズを使って、手の届かないところの花も、肉眼では気づかずに見過ごしてしまう花も、名のわかるものも名の知らないものも、どれも色鮮やかに写された 1 葉 1 葉がアルバムに綴じられていた。撮影のようすを聞きながら、どんな小さな花や葉にもそのかたちがしっかりとあると知った。

だいぶカメラを重く感じるようになってきたという。それでも、高性能カメラに望遠レンズやマクロレンズは、力強く頼りがいのある彼の相棒なのだ。

合歓の木の話になった。かつては島のいたるところにあり、子どものころは触ると閉じる葉がおもしろかったと笑っていた。それは遠い記憶のなかでオジギソウと混同しているのかもしれない。合歓の木は夜になると自然と葉が閉じるとのこと。ごくわずかになった合歓の木はいま、大島の「風の舞」のところに 2 本あるばかりという。1 本は、崖に根がむきだしになっていて、木のいのちの力強さを感じさせている。和毛（にこげ）に似た花はたおやかだ。島の植生がずいぶんとかわったという。確かに松も減っている。依然はタケもあちこちにあったというので、いまは産廃処分場の方にしかないですからねえ、と応じると、ちょっ

ミセテ
あげる

と不思議な顔をしながら、松茸、赤茸いろいろあったと、竹ではなく茸のことだった。

この時期の島には、梔子と紫陽花が咲いている。帰りの船に乗ろうとする桟橋で、そういえば今年は蟬が遅いと、ふたりの在園者から聞いた。つぎに来るときは、もっと暑くなっているだろう。水が心配になる季節がやってくる。島の北風呂には、7 月 1 日からシャワーのみとするとの貼り紙があった。

◆

つぎの訪島が、それからおよそ 2 週間後となった。台風一過の暑い夏の日となった。四国へわたるそのまえの日は、台風のせいで関西の鉄道はあちこちで乱れ、JR の列車が 4 時間以上も立ち往生したところがあった。その余波で、わたしが乗った日も、最寄駅から京都までいつもの倍の時間がかかった。京都では予定していた新幹線に乗れなかった。

このときは、ふたり在園者といっしょに、外から大島を眺め、それを撮るという目的があった。聖日礼拝のおこなわれる教会の礼拝堂に入ると、ひとりの信徒がきょうは体調が悪いという。撮影を望んでいた当人の不参加、くわえて暑さのほども心配で決行するかどうか迷ったすえに、もうひとりの信徒とわたしたちとで、庵治から屋島までを経廻ることとした。

同行者は午前の便で高松にわたりレンタカを手配し、在園信徒とわたしは午後最初の庵治便に乗った。大島庵治航路は、まだ 3 度くらいしかとおっていない。大島は南北の軸を縦にすえると、L 字の左右を反転させたかたちとなっている。L の下を大回りする航路から視る大島は、普段の大島高松航路からのようすとずいぶんと違うと感じる。15 分くらいで庵治港に入り、船は港内をゆっくりと進む。

まずは屋島の南を東から西へぐるっと廻りこんで、その突端にむかう。屋島も瀬戸内海国立公園のなかで、海に突きでた台形の山のその先端がまた少し西にのびている。途中、案内図のあるところに車を止めて、最先端まで歩く。そこを、「長崎の鼻」という。案内図には、左端に高松市街が、右端には稲毛島が配され、そのかんに、小豆島、鎧島、大島、小豊島、豊島、男木島、女木島の島々が描かれている。そこから 30～40 段ほどの石段をく

ミセテ
あげる

だる。環境庁と香川県による「長崎の鼻砲台跡地」の説明板が倒れている。幕末のペリー来航後に、高松藩がここに砲台を築いたとのこと。

この「長崎の鼻」に立って、ずいぶんと感動した。大島が起伏の乏しい平たい島に視える。高松大島航路をとおる船の窓からいつも、屋島の先端を視て、台形の底辺の先を長い象の鼻のように感じていたが、そこからさらに「長崎の鼻」がのびているとはわからなかった。鼻の周りは潮の流れも速い。そこを泳ぐひとと犬がいた。地元のひとなのだろう。余所者の眼には、泳ぐには怖い勢いの潮に視えた。

わたしたちが鼻に立ったとき、うまいぐあいに大島行の高松便が出航する時刻となった。在園信徒に、もうすぐきます、といって、3 人で定期船「まつかぜ」を待った。あれじゃないですか、とわたしがいうと、在園信徒はなにもいわない。それより少し遅れた船が視えたとき、彼が、せんせい、あっちや、という。先の船は小豆島へゆく高速艇で、そのあとが「まつかぜ」だった。彼の目はわたしよりもはるかによく利く。大島行の船が海のうえを動くようすを、高松と大島ではない場所から初めて視た。いつもあれに乗るのかとおもうと、とても不思議な気がした。

在園信徒はかつて若いときに、自分たちの舟を大島から漕ぎだし、この鼻の西側の浜にきて、「めだけ」（女竹か）を 50 本ほども取ってきたといった。そういう細い竹が大島にはなかったという。もうひとり舟でてた在園者は、反対の東の方に廻って民家にいってしまい、怒られたとのことだった。いま、大島をでて、外から大島を眺め、かつての大島でのことを思い出してそれを話す。

◆

屋島の麓をぐるりと一周して、こんどは台形のうえへと車を走らせる。駐車場の近くの展望台は、おおよそ台形の天辺の中央部で、北にのびる嶺が邪魔をして大島をのぞめない。在園信徒は、職員が屋島のうえから大島の写真を撮った、というのだが、それがどこかわからなかった。途中にあった路肩の展望台からは少しは視えたような感じだったので、そこから撮ったのかもしれない。それにしても、島影が朧に重なる瀬戸内海の眺めは美しか

った。

かなり暑くなっていたので、庵治では車から降りずに、防波堤越しに大島を眺める。数年まえにわたしは庵治から大島を視たことがあった。はっきりとかたちを見分けられる寮のようすを今回また確かめた。屋島から庵治へむかうとき、あとでみんなでご飯をたべましょう、とわたしがいうと、在園信徒はすぐに、はい、と応じたので、それを楽しみにして、庵治を早々に離れた。三連休のなか日、夏休みの始まり、道路は少しずつ混んでいった。高松まで予想以上に時間がかかった。

夕方というにはまだはやい時間帯、日曜とはいえ、開いている店が少ない。会食はあきらめ穴子のお弁当を買って、大島行の最終便に乗った。

島に着くとまず、体調が悪いという在園信徒の寮にむかう。おつれあいがでて、いま寝てるとのこと。気がかりなまま、ともに庵治を廻った信徒にご飯いっしょにたべますかと尋ねると寮に帰るとのことで、ひとり霊交荘へ。暑かったし、慣れない車でのドライヴだったので、ずいぶんと疲れたこととおもう。ただ車で廻って写真を撮るとしか伝えていなかったが、在園者はでかけるにあたって、きちんとズボンにシャツを着て靴を履いていた。T シャツにジーンズのわたしより、よほどきちんとした装いだった。

◆

翌朝、帰るまえに霊交荘をかたづけ、ごみを捨てにゆこうとして戸を開けると、寝込んでいた在園者が自転車を止めたところだった。霊交荘できのうの写真をいっしょに視る。彼は寮が入る視野を得たかったようで、そうすると大島の北方にある兜島か鎧島から撮るのがいいかもしれない、職員も舟をだすといっているのだが、ということだった。桟橋も船着き場もない両島へ、海上タクシではゆけないかもしれない。自前の舟をもたないわたしたちにはむつかしい道行ならぬ海行となる。

心月園とそのまわりの松林の端に、夏祭り用の資材が積まれてあった。今年は 8 月 5 日だと聞いた。島の夏も暑い。

1 ページの写真は、2015 年 7 月 19 日に屋島から高松市街を撮影。

ミセテ
あげる

放送タイトル	番組タイトル	局	放送年月日	時間
シリーズ　ハンセン病訴訟　何が問われているのか：前編 隔離政策はこうして続けられた	ETV 2001	NHK教育	2001.05.28	44
シリーズ　ハンセン病訴訟　何が問われているのか：後編 どう尊厳を回復するのか	ETV 2001	NHK教育	2001.05.29	44
ハンセン病　隔離はこうして続けられた	NHKスペシャル	NHK総合	2001.06.16	49
空白の故郷へ：ハンセン病元患者、再生への道	テレメンタリー2001	朝日	2001.11.04	25
90年間の隔離政策はなぜ	NEWSゆう+	朝日	2001.11.07	11
シリーズ　加賀乙彦　ハンセン病文学者との対話　第二回　風見　治	ETV　2003	NHK教育	2003.02.20	43
宿泊拒否：ハンセン病回復者の人権	ETV　2003	NHK教育	2004.03.13	44
30年ぶりの再会	生活ほっとモーニング	NHK総合	2004.10.	31
差別は今も…ハンセン病と被差別部落	報道ステーション	テレビ朝日	2005.03.02	1.16
未来への道標：ハンセン病とは		びわ湖	2006.01.08	28
海峡を越えた問いかけ　韓国ハンセン病患者の90年	ETV特集	NHK教育	2006.04.15	1.30
強いられた妊娠中絶	クローズアップ現代	NHK総合	2006.05.08	21
ハンセン病　終わらない「隔離」：退所者たちの日々	福祉ネットワーク	NHK教育	2006.08.02	29
海を渡る詩	NNNドキュメント‘08	読売	2006.10.30	25
忘れないで：瀬戸内ハンセン病療養所の島	ハイビジョン特集	NHK総合	2007.09.08	1.49
FNSドキュメンタリー大賞　ノミネート作品　ハンセン病、迷宮の百年　医師たちの光と影		関西	2007.12.17	47
ハンセン病元患者68年ぶりの帰郷	ニュースウォッチ9	NHK総合	2008.12.04	8
その手をつないで　ハンセン病の島から未来へ	NNNドキュメント’10	BS日テレ	2010.10.03	24
ハンセン病　元患者の思い：なぜ「過去」を隠さなくてはいけないのか	FNNスーパーニュースアンカー	関西テレビ	2010.10.07	12
島とアートを巡る冒険：瀬戸内国際芸術祭2010	日曜美術館	NHK教育	2010.10.09	44
望郷の島から：ハンセン病と家族の絆（きずな）		関西テレビ	2010.10.11	46
ひびきあう島と芸術：瀬戸内国際芸術祭2010	とびきり　しこく8	NHK総合（大津）	2010.10.22	45
差別が消えるまで：ハンセン病回復者　伊波敏男の生き方	テレメンタリー2011	ABCテレビ	2011.04.03	27
ダブル　プリズナー	テレメンタリー2011	ABCテレビ	2011.05.22	24
“ハンセンの島”のカフェ	目撃！日本列島	NHK総合（大津）	2011.06.25	22
見えない壁　揺れる心：ハンセン病療養所に保育所	テレメンタリ―2012	ABCテレビ	2012.05.19	24
かかわらなければ	ハートネットTV	NHKEテレ（大阪）	2012.12.27	29
アートシーン	日曜美術館	NHKEテレ（大阪）	2013.07.14	15
瀬戸内国際芸術祭	NIKKEI×BSLive 7pm	BSジャパン	2013.03.28	55
魔法にかかった島々		BS朝日	2013.09.21	52
Journeies in Japan		NHKBS1	2013.09.22	28
僕は忘れない	ETV特集	NHKEテレ（大阪）	2013.10.12	79
ハンセン病 島の記憶をつなぐ	ハートネットTV	NHKEテレ（大阪）	2013.11.07	29
ハンセン病の悲劇をくりかえさないために	NHKアーカイブス	NHK総合（大津）	2014.07.06	70
壁よ、さようなら：ハンセン病元患者と子どもたち	テレメンタリー2014	ABCテレビ	2014.08.31	24
胸の泉に：ハンセン病家族の葛藤	地方発ドキュメンタリー	NHK総合（大津）	2014.09.16	42
ハンセン病特別法廷と裁判所の責任	時論公論	NHK総合（大津）	2014.11.13	9
ハンセン病を知っていますか	探検バクモン	NHK総合（大津）	2015.06.01	25
ハンセン病の戦後：人間回復への道　再	ハートネットTV	NHKEテレ（大阪）	2015.06.11（6/4）	30